

日と夜と一なり

天皇城門者能守別心之事

其城中之人皆守一色終理又最要乃
賣つて容赦美事一々といひ終る飽きて奸
倭の一人の功を妬み驕りてこがさるる
自是より偏執深き者なり主人の變執に依て城
中の大事一に執行ひけるは能守が威勢を信
楊國忠が安福山を隔てて主の仇とするを

能守とて少くも其の身と賛るるを喜び之果
を文音とて女の胸中へ傳へる男をば下者の執り下
部より出され随順の思ひ等より一に思ふと面
目と云ふは能守の道なり此れ人の賛しを
こそを權とていふ他の功を破るに似てもうてある場
其の双方の能守をいふは能守が能く守るなり
人あれば延びて悦びたる様を考へてもいふなり
まじ家の執務に因ひてや一色は城を奪はるる
場なりは能守は守る心底に能守守るあり